

# 移植医療と私

私は長年、腎移植という治療に関わっています。

学生時代にある先生からの話を聞いてから移植医療というものに関心を持つようになり、仕事として腎移植を受ける、または受けた方々と関わるようになりました。

なぜ、私が移植医療に関心を持つようになったのか？自分自身でふとそう考えた時、他の外科的手術とは意味が全く違うものであること、まずそれが一番大きな点だと思います。

一般的に外科的手術といえば、悪いところを取り除いたり、傷害を受けた臓器や組織を縫ってつなぎ合わせたり…手術が成功する=治った=ゴール、と意味する手術が大半です。

しかし、臓器移植の手術は機能不全となっている臓器を新たな臓器を植えることで機能の回復を図ることが目的です。つまり、手術がゴールではなく、新たな臓器が移植された時点からスタートする手術であること、それは体の状況が急激に変化するだけではなく、その人の人生そのものがリセットされて新たなスタートを切る。そんな素敵なお治療に関わっていきたい、そんな思いが私を今まで支えてきたのだと思います。

私も若い頃は手術直後から大量に出る尿に驚き、手術後の経過を見ることに興味津々でした。当時は尿がほとんど出ていない状態で移植を受ける方がほとんどで、手術後に自分で排尿する時に、「おしっこの仕方がわからない」と言っていた言葉がとても印象に残っています。自分自身が経験と年齢を重ねるごとに、移植の手術を受けようと思う方たちの気持ちや心理、また、その方を支え、腎臓を提供しようと思う家族の気持ち、その家族間の関係性などについて興味を持つようになりました。



移植医療、特に私が長年関わってきた腎移植は、手術を受けることで透析生活での制限や拘束から開放されます。まさに人生をリセットした気持ちになり、将来に夢を持つことができると思います。

腎移植医療の上で周囲からも目を向けられることが多いのは腎不全という病気をもった臓器をもらう側です。しかし、本当の意味ではどうなのでしょうか？

実際、献腎移植はなかなか件数が増加せず、現実的には生体腎移植がほとんどです。生体腎移植の場合、ご家族からの腎臓提供があって初めて可能となります。しかし、その腎臓提供はご家族自身が「提供したい」という気持ちを持つことが大事で、強要されるものではありませんが、時に「この人は自分から提供したいと思っていない。むしろ、提供したくないと思っているのではないか？」と思うケースに出会うことがあります。本来、生体腎移植の提供者となる方は大きな病気の経験がなく、“健康”と言われる方が対象です。病気でもないのに、手術をして痛い思いをして、元々2つあるべき腎臓が1つになること…普通、そんなつらいことを自らすすんで名乗り出ようなんて思う人はまずいないと思います。それなのに、なぜ自ら提供しようという人が存在するのでしょうか？

そこには親としての責任だったり、親子・夫婦など家族の愛情だったり、中には私が腎臓を提供して夫に元気になってもらわなければ、妻である私も共倒れになってしまふ…といった利害関係がからんでいることも実際あると思います。いい意味であれ、そうではない意味であれ、家族自身が提供しようという気持ちを持っているのであればよいのでしょうか、腎臓をもらう立場の人が、怖くて拒否している家族を脅迫したり、立場を利



用して強要したりするのはあってはならないことです。

家族だから断れる人もあるれば、逆に家族だから自分の正直な気持ちが言えない人もいると思います。

病気の人の本当のしんどさ、つらさは病気の本人でないとわからない、その通りだと思います。だからといって、自分のことしか考えず、家族を犠牲にすることは当然なのでしょうか？

家族間であれ、それぞれ個人には平等に権利があるはずです。

移植という医療、特にご家族から提供を受けての移植の場合は受ける人、提供する人ともに同等に配慮されるべきだと私は思います。

現在は、免疫抑制剤の改良や治療の進歩などにより、移植を受けるまでの門戸が昔より広くなっています。ですが、なんでもあります。

まずは自分自身が病気と向き合い、家族と支えあいながら治療に取り組み、その過程の中で移植という選択肢を家族と話し合い選び、移植を受ける…そういった形が最善なのではないかと今まで移植医療と携わってきて感じることです。

そんなのはきれいごとだと思われる人もあると思います。でも、家族とはいえ、健康な方から臓器をもらうということは重大なことで勇気のいることではないでしょうか？

だからこそ、ご家族から提供を受けることができた方にはもらった臓器を大切にしてその後の人生を過ごしていただきたいと思います。それが提供してくれた家族に対する最大のお礼になると思います。

移植医療が発展・進歩していくことは喜ばしいことですが、その流れの中でも人間として忘れてはいけないもの、大切にしなければいけないものがあるのではないか…

